

# 1998.12.24

## 絵本学会 NEWS No.5

発行：絵本学会

発行日：1998年12月24日

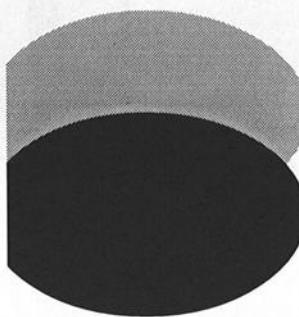
編集：絵本学会事務局・広報委員会

事務局：〒187-8505 東京都小平市小川町1-736

武蔵野美術大学視覚伝達デザイン研究室内

TEL: 042-342-6091 FAX: 042-342-5173

<http://vcd.musabi.ac.jp/~ehongaku/homepage.html>



【絵本フォーラム'98 PART2】報告  
ドュシャン・カーライ特別講座報告  
関西圏会員の集い報告  
記者募集 etc.のお知らせ  
インフォメーション—絵本関係展覧会・イベント  
事務局からのお知らせ

## 絵本学会

### 『絵本フォーラム'98 PART2』報告

香曾我部 秀幸

『絵本フォーラム'98 PART2』が、9月20日(日)東京の世田谷文庫で開催されました。去る1月の第1回当日は、あいにくの大雪のために参加出来なかった方も多く、残念な思いをしましたが、今回は爽やかな快晴の秋空の下、130人を超える熱心な参加者に恵まれ、活発な論議が行われました。

前回のテーマは、「絵本は「いま」～現場からの報告」というものでした。受容・創作・流通・再発見の4つの異なる現場で絵本に携わる方々からの報告を柱に、絵本を取り巻く現在の状況が語られました。その報告は、多彩で変化に富むものでしたが、とくに、絵本を「コミュニケーションの表現」の一環として捉え、絵本は〔読み手=聞き手〕という受容の場があつてこそ、初めて表現として完成されたものとなる、という考え方方が、共通の認識として示されたことが、特に興味深く印象に残りました。

そして第2回目の今回のテーマは、「『よい絵本』ってなんだろう」。初回のフォーラムで語られた「読み手」の問題に焦点を当てる試みです。一般的な読者が(とくに親が子に)絵本を選ぶとき、何を基準にすればよいのかわからないという話をよく聞きます。書店などで現物を手にとってみても迷うばかりで、結局あの悪名高い「課題図書」を始めとして、いわゆる「必読図書」や「選定図書」といった類の権威や、〈ブックリスト・ブックガイド〉などにたよってしまいがちです。しかしそれらが果たして絵本が持っている多彩な魅力、多様な側面を充分に伝えているものなのかどうか、大いに疑問があります。一方、作り手の側からは、「よい絵本なのに売れない」と嘆く言葉もよく聞こえます。ところが「よい絵本」なのに売れない、という考え方には、得てして「売れる絵本」は良くない、という逆説的な論にもつながりかねません。これは正当な批評とは言えないでしょう。また書評などで高い評価を受けたにもかかわらず、一般的な読者の目に触れないまま、書店の棚から姿を消してしまう絵本も沢

山あります。その逆に、評価は決して高くないのに、常に店頭に山積みされる絵本もあります。そんな環境の下で、私たちは本当に「よい」絵本と巡り合うことができているのだろうか、ずいぶん多くの絵本を見逃しているのではないだろうか、さらに言えば、私た自身が、果たして確固たる価値基準を、絵本に対して持っているのだろうか、という疑問を誰もが抱いているのではないでしょうか。自分が「読みたい」あるいは子どもに読ませたいと思う絵本と、子どもに絶大な人気を持つ絵本との相違は、一体どこにあるのでしょうか。絵本の評価をめぐる論議は最近ずいぶん活発になってきているはずなのに、読者が「よい絵本」を求めているのにもかかわらず、「よい絵本」という言葉だけが一人歩きし、その本質が深く論議されることが今までほとんど無かったのも不思議なことです。

そこで今回のフォーラムでは、この「よい絵本」とは、一体どんなものなのか、について突っ込んで考えることにしました。まず午前の第1部では、異なった分野で絵本と正面から取り組んでおられる3人の方々(『ごたごた絵本箱』等の著書でお馴染みの松井るり子氏・「絵本心理学」の領域で緻密な絵本分析をされている鳴門教育大学の佐々木宏子氏・福音館書店の「こどものとも」編著者として話題作を多数送り出されている澤田精一氏)に、それぞれの立場から問題を提起していただき、それをもとに、午後の第2部および第3部で、例によってワイワイガヤガヤと意見を交換しました。(こうそかべ・ひでゆき／絵本学会企画委員長)

#### ◆ 第1部 講演

##### 1. 「読み手の立場から」 松井るり子氏

松井さんのお話は、[好きな色・物音・匂い・食べ物・手触り]を互いに尋ね合うことから始まりました。「好き」を見つけるために、五感を通じて自分に尋ねることの大切さをそこで語られました。親が子に絵本を読むことの意味は、知育などの効用を求めることがではなく、親の「心



の「好み・楽しさ」が子どもの心に自然に残されること。そのため大人自身が「好き」と思える絵本を選ぶことが大切で、好きでもない絵本を他者の評価を理由に選んでも、親の「好きじゃない」気持ちが子どもに伝わり、「絵本は忍耐を養うもの」という逆効果にしかならない。では絵本の「好き」をどうやって見つければよいのか。そこで最初の質問が重大な意味を持つことに気づかされました。自分自身の生活と体験と感覚を土台として「好き」を発見し、大事な人と楽しい気持ちを共有できる絵本こそ「よい絵本」という松井さんの考えは、多くの人の共感を得たようでした。

## 2. 「研究者の立場から」佐々木宏子氏



冒頭、食事中に『仮面ライダー』アニメ絵本に没頭して絵本とスパゲティのサンドイッチ状態を作った男の子のエピソードを例に、読み手と絵本の「関係の質」によって「よい絵本」が決まるという趣旨が提示されました。つまり、「誰にとって『よい絵本』なのか」が問われるべきだという考え方です。「よい絵本」という概念は、絵本自身に備わっている特徴だけを論じても意味が無いし、読み手の性格や読書歴だけを考えても意味が無い。佐々木さんが長年取り組んでこられた、絵本表現の心理学的分析で、観点・視点を変えると「優れた」絵本の種類は全く異なったものが出てくるということから言っても、「よい絵本(悪い絵本)」とされるものは、あくまでも相対的なものであり、最終的には読み手が自らの判断でよい絵本について考え、主張するしかないという問題提起がなされました。(詳しくは生田美秋氏の報告をお読みください。)

## 3. 「創り手の立場から」澤田精一氏

『こどものとも』編集者として話題作を提供してこられた澤田さんは、ご自身は常に「おもしろい絵本」を目指しており、「よい絵本」(つまり他者の評価)は結果に過ぎないと語られます。『ジャリおじさん』が、初め編集部内でも最悪の評価だったものが、数々の賞を得て今や最高の評価を獲得しているし、『おなかのすくさんぽ』が発行当初返品の山になったのが、現在ではその表現の力強さ・豊かさが高く評価されているという事実からも、「よい」という価値観は極めて漠然としたものです。なのに「よい絵本」が問題となるのは、絵本に教育的効用を見出そうとする意識が大人の側にあるからで、大人自身が絵本を楽しむ体験を積めば、「よい絵本」論議に固執する必要も無くなると述べられました。ただ、色々な観点から質的に「よくない」絵本は確かにあり、そのような存在に対する批判力判断力を失ってはならないという警鐘は、印象深いものでした。(こうぞかべ・ひでゆき／絵本学会企画委員長)



「絵本フォーラム' 98 PART2」第1部 講演風景

## ◆ 第2部 談話サロン

昼食休憩の後、3つの部屋に分かれ、第1部の講演者を囲んで、参加者相互に活発に話題が展開されました。各部屋の司会を勤めたまたは参加した企画委員の方々から報告をしていただきます。

### 1. 「松井るり子の部屋」からの報告 三好優子

第1部で松井さんから、子どもは「それぞれ異なった志を持って生まれてきた」というお話を伺い、改めて多くの子ども達の生き生きとした存在を身近に感じ、とても新鮮な気持ちで第2部に臨みました。「松井るり子の部屋」は、松井さんの「皆さんの好きな絵本は?」の質問から始まり、全員が自分の好きな絵本の名を挙げました。

#### 〈参加者の好きな絵本〉

「はじめてのおつかい」「あくたれラルフ」「ひとまねこざる」「めっつきらもっkirādoおんどん」「ちいさいおうち」「いもうとのにゅういん」「よあけ」「めのまどあけろ」「よいちととんび」「ふたりはともだち」「どろんこハリー」「3びきのくま」「からすたろう」「モチモチの木」「とんことり」「ウィリーとともにだち」「ぼくにげちゃうよ」「ぱんやのくまさん」「トーマス」「どんなにきみがすきだか　あててごらん」など、次々と挙げられました。

#### 〈参加者からのひとこと〉

「自分自身も『コッコさんシリーズ』のような親と子の関係になりたい」、「絵本を読むことで、子どもがこんなことを考えているのかと気づき、『ほんわか』とした気持ちになります」、「絵本の持つ“癒される”という感じが好き」、「絵本を通して、人とのつながりが広がっていくのが楽しみ」、「このせわしない世の中で『ぼちぼちいこか』が気にいっています」、などの意見が出ました。また、「昔ばなしに興味があり、全世界共通のものがあるので不思議に思う」と言う一方で、「最近は昔ばなしが語られなくなったということを知り、驚いている」の声もありました。

#### 〈松井さんの絵本選び〉

何かを好きになるというときは、「先に『好き』になってしまって、とにかく『好き』ということがある」もので、絵本選びにもその気持ちを大切にしています。そしてこれならばテレビにも勝てる!という、おもしろい本を探します。そのためには手間ひまかけて、お母さんやお父さんの好きなものを見つけ出しましょう。

#### 〈どんな読み方をしたら良いの?〉

子どもはお母さんが絵本を読んでくれる時には、そこにいてくれるだけで良くて、女優ではないので、感情たっぷりに読むのは嫌がります。感情を抑えて、淡々と読むのが良いようです。

### 〈昔ばなしについて〉

昔ばなしは池のようなもので、そこから聞き手が何をとってくるかが問題です。波を立てずにそっとしていると、とりやすいのです。また本を選ぶ場合、「グリム童話」を例にしてもわかるように、様々な訳が出版されています。その中からどれを選ぶかによって、以後の印象が大変違ったものになってしまいます。この点は慎重に選ぶ必要があるのではないかでしょうか。「グリム童話」を素材にした絵本を多く描いているフェリックス・ホフマンの「ながいかみのラブンツエル」や「七わのからす」は良いと思います。

### 〈子どもの成長と絵本〉

絵本を読む時は、自分のために読み、自分が考える時のヒントにしています。子どもの教育のためではなく、自分のために読んでいるようにすると、良い結果が出ます。無欲でいるのが良いのではないかでしょうか。いつも機嫌良くのんびり暮らし、日々の暮らしから良いものを見つけ、親自身が幸福感を持つことが、子どもによい環境を与えることになると思います。

### 〈「松井るり子の部屋」に参加して〉

「よい絵本」っていうのは「子どもの癖を代わってやってもらうと楽」で、「親の意図が子どもに伝わり、子どもに嫌がられてしまう」ような本ではなく、「子どもが夢中になって読ん」で、「ページが破けたら、セロテープを貼ってでも読みたくなる」ような本なのでしょう。それは、「大人自身が『好き』と思える絵本」なのだということがよくわかりました。松井さんの言われた、子どもの心に残るのが「読んでくれた大人の心のはずみ」ならば、なおさら『好き』な絵本を焦らずに探し、日々の「機嫌の良い暮らし」の中で読んであげたいと思いました。(みよし・ゆうこ／絵本学会企画委員)

## 2. 「佐々木宏子の部屋」からの報告 – “よい絵本”について考えること～を通して 生田美秋

“よい絵本”とは何かという問いは多くの問題を含んでいる。受容者の立場からは、子どもに“よい絵本”を読ませたいが何をどう選んだらいいか分からぬという絵本選択の問い合わせが。創作者や編集者の立場からは、“よい絵本”なのに売れない、“よい絵本”が子どもとの出会いもないまま品切れになっているのは何故か、という絵本の出版流通に対する疑問が。研究者からは、“よい絵本”について十分な議論や選択の基準の曖昧なブックリストが流布していることには問題があるなどなど。佐々木氏の報告と分科会での討議を中心に、以上の点を整理し、新たな討議の問題としたい。

### 1) “よい絵本”とは

佐々木氏の主張の要点は、(1)長年読み継がれてきた絵本も“よい絵本”ではあるが、ある少数の人にしか共感されず、あっという間に市場から消えてしまった絵本も、その人にとっては“よい絵本”である。(2)権威ある「コルデコット賞」受賞絵本であっても、ジェンダーその他歴史的、文化的視点から“よい絵本”とは言えないものがある。ということだった。

分科会では、佐々木氏より“よい絵本”的条件として、『てぶくろ』『おおきなかぶ』のようなめくる効果を生かした例、子どもの内面を巧みに表現したファンタジー『大あらし』の例などが補足説明され、特に子どもの表面的な行為のみにとらわれることなく、事実に根ざしたファンタジーの重要性が強調された。質疑では(1)『The Story of LITTLE BLACK SAMBO』の評価をめぐって。(2)『大あらし』は構成、表現において優れているが、絵のオリジナリティに疑問は

ないか。(3)絵本の表現や構成以外の点についても、“よい絵本”的ベーシックな基準は必要ではないか。(4)抽象的な“よい絵本”論ではなく、一冊一冊の具体的な批評が重要である。批評がしっかりとないと、受容者や創作者も手探りになる。等の意見が出された。ここで、佐々木氏が紹介された、『仮面ライダー絵本』に夢中になる子どもの例は、子どもが夢中になる絵本イコール“よい絵本”と受け取られかねない点を指摘しておきたい。面白い、夢中になれるということは“よい絵本”的最も大切な要素であり、その意味ですばらしい絵本との出会いであることは否定しないが、その絵本の面白さが興味本位の表面的なものであった場合、その子の心の栄養となる本当の意味での“よい絵本”と言えるであろうか。“よい絵本”とは面白く、夢中になれるだけでなく、“よい絵本”的ベーシックな条件を具備し、その上でその子の心の栄養となる絵本を言うのではないだろうか。また、好き・嫌いという個人の主観の次元の問題と、よい・悪いという一定の客観的な基準、根拠を持った次元の問題とを混同することは、絵本を学問として議論していく場合、気をつけなければならない点であろう。今回のフォーラムの参考資料として“よい絵本”についての作家・評論家の主要な見解を掲載した。これらの見解に共通する点を要約すると、(1)絵は、デッサンが確かにオリジナリティに富んでいること。(2)文は、正しい日本語で表現され、文で語れないものを絵で、絵で表現できないものを文でという意味で、絵と有機的な関係にある。(3)ストーリーの背景に主題となるテーマ(作者の哲学)があること。読者が物語の世界に自然に入り込める絵本、物語をよく語っている絵本。といった点が挙げられる。このような条件は、子どもに人気のある絵本、長く読み継がれている絵本の古典の特色とも合致しており、“よい絵本”的ベーシックな条件と言ってよさそうである。“よい絵本”的相対性の例として提示された『…SAMBO』も、ふさわしい例であったかどうか疑問である。“よい絵本”的歴史的、文化的相対性という概念が、“よい絵本”と“悪い絵本”的境界を曖昧にする面にのみ作用する危険には十分な配慮が必要である。

### 2) 絵本選択の問題

ベーシックな“よい絵本”的条件を指摘できたとしても、それがイコール“その子にとってのよい絵本”であるとは限らない。この点が今回のフォーラムで佐々木氏や松井氏が強調された点である。“その子にとってのよい絵本”とは、“よい絵本”一般ではなく、その子の成長段階や個性、その子が持っている関心や興味をふまえて“よい絵本”の中からふさわしいものを選択して初めて“その子にとってのよい絵本”との出会いとなるのである。次に佐々木氏の主張は、(1)一人の子どもの精神的現在が必要とするものと、その時手に取れる範囲で存在する絵本との出会いが、“その子にとってのよい絵本”である。(2)他者が“よい”と判断する価値基準を納得できないのに自らの“よい”に取り込まない。(3)“よい絵本(悪い絵本)”とされるものは、相対的なものであり、最終的には読み手の判断で“よい絵本”について考え、選択するしかない、という3点である。一人一人が自らの意志と責任で主体的に絵本を選んでいくことが大切であるという佐々木氏の主張は多くの参加者の共感を得た。しかし“よい絵本”的ベーシックな条件が分かり、絵本選択を主体性をもって選ぶ姿勢を理解できたとしても、書店で“よい絵本”と“悪い絵本”を見分けることができるとは限らないのが現実である。以上の指摘だけでは受容者へのアドバイスとしては不親切である。佐々木氏は『絵本と子どものこころ』の中で、絵本『いばらひめ』の比較研究、

「ネコの絵」の実験を通して「現代日本の子ども達は、色彩の氾濫の中でどうしても表面的に華やかなものにひかれ、素朴で気品のある美しさには近づけないのでしょうか」と絵本選択のむずかしさを指摘している。具体的な絵本選択での第一歩としては、鳥越信氏の「子どもの本の選び方12項目」(『子どもの本の選び方』所収)も参考となるが、やはり佐々木氏が前著で主張されている通り、図書館、子ども文庫に出かけることを勧めるのが適切であろう。図書館で繰り返し借り、本当に気に入ったらそれを一冊ずつ書店で買い求める、というのが一番賢明な方法である。その繰り返しの中で少しずつ「よい絵本」を実際に見分ける眼も養われる。ここで図書館司書(絵本担当)の役割的重要性が浮揚してくるのだが、これは別途フォーラムのテーマとなることもありうるので省略する。

### 3) ブックリスト、「よい絵本」と出版流通…

佐々木氏の報告では触れられなかったが、分科会で提出された問題について要点のみ記しておく。参考資料として添付した「絵本のブックリスト」でも分かる通り、ブックリストも個人の選択によるもの、協議会など団体によるもの、年齢別・テーマ別と実に多種多様であり、読者が上手に、主体的に活用すれば絵本選択の参考として有効な状況である。ブックリストの問題点は、過去にも論議され(『日本児童文学』昭和42年11月号、特集ブックリスト)出尽くした感もある。分科会では、カナダの「少年少女の家」で発行されているような信頼できるブックリストが日本でも発行できるかどうか、議題とはならなかつたが、「課題図書」のような強制を伴う読書推進運動の子どもに及ぼす逆効果といった点が今後の検討課題となるであろう。佐々木氏の著書から転換した「ロングセラーリスト」「子どもに人気のある絵本リスト」を見る限りは、「よい絵本」が読まれており、改めて「よい絵本」を論議する必要もなさそうなのだが、書店の実情を見るとき、そうとばかりは言っておられないというのが正直なところである。絵本学会設立の一つの理由がこの点にあることは想起しておいていい。「今つくられている絵本というのは出版社の利益追求を急ぐあまり、非常に早く、わりあい安易につくられているものが多すぎて、全般的な傾向としてはよくないんじゃないかという気がかりになっているわけです。したがって「絵本学」なんて大上段に言った方が、編集者や絵本を描く人などの考えがちょっと違ってくるのかなと、そこをねらっているわけです」(『ピーブー』16号での太田大八氏の発言)。児童出版社といえども私企業、資本の論理と編著者・作者の良心のせめぎあいのバランスが崩れるとき、売行き第一主義の絵本が壊を切って流れ出す危険は常にはらんでいる。桂宥子氏の『理想の児童図書館を求めて』(中公新書)では「出版社は利益をあげるために、図書館に買ってもらえる作品を出版しなければならない。つまり、図書館の選択基準に合う作品を出版せざるを得なくなる」とし、公共図書館の厳しい図書選択が児童出版界の質的向上に大きく貢献しているカナダの実例が紹介されている。「よい絵本」を議論することの重要性を述べてきたが、「よい絵本」と「悪い絵本」を厳しく選別するあまり、絵本作家の自由な発想や冒險を許さない雰囲気を醸成することには十分な配慮が必要である。「よい絵本」のベーシックな原則は大切だが、表現のスタイルや画風などには寛容であり、むしろ創作者のチャレンジを歓迎する姿勢こそ重要である。そうでないと日本の絵本がますます狭くパターン化されたものになり、絵本の豊かな発展を阻害する恐れさえある。この報告が一つの問題提起となり、さらに議論が展開されることを期待したい。(いくた・よしあき／絵本学会企画委員・世田谷文学館)

### 3. 「澤田精一の部屋」からの報告 川西芙沙

[参加者：約60名(会員と非会員半々) 配布資料：1)ブルーナの絵本『うさこちゃんとうみ』の比較表(日本語訳、英語訳、原著のオランダ語からの直訳のもの)、2)朝日新聞9月12日号の記事]午前の講演「創り手の立場から」を基に、まず澤田氏からより詳しく、具体的に「よい絵本」への信念と絵本制作過程をうかがい、その後、アンケートの回答を参考にしつつ、参加者の声を聞いて、「よい絵本」は何かを探った。創り手の澤田氏としては、翻訳の適切さや差別、逆版等の基本的な線上(例『うさこちゃんとうみ』『かなえちゃんへ』『ちびくろさんぽ』『ちょっとまって』等)で問題になるものもあるが、長年、福音館の編集者として絵本づくりに携わってきて、常に目指しているのは「おもしろさ」であること。本をつくるとき、「よい絵本」という観点からは作業に臨まないこと、制作過程では意外性にまかせる部分が多く、「よい」という判断は結果から出てくること。絵本では絵が言葉に従属する形ではなく、絵独自の展開がある形がのぞましいこと、等が挙げられた。一方、参加者からの声としては、「よい絵本」は「自分が好きだと思えるもの」「おもしろいもの」「文と絵がひびきあっているもの」等で、絵本を選ぶ基準も、自分が「ひきこまれるか」「おもしろいか」が多く挙げられ、結局創り手(澤田氏)側と読者(参加者)は、読書というものがきわめて個人的な体験で、「よい」という評価基準は相対的なものでしかありえないこと、その場合「おもしろさ」が大きな比重を占める、ということでおおまかに意見が一致した。また参加者からは、子どもに嫌いだった絵本の面白さを教えてくれた例として『おなかのすくさんぽ』が挙がった。(かわにし・ふさ／絵本学会企画委員)



「絵本フォーラム'98 PART2」第2部 講演者を囲んでの談話



『絵本フォーラム'98 PART2』第3部 自由討論

### ◆ 第3部 各サロンからの報告と自由討論

Tea Breakの後、再び一會場に合流し、第2部で語られたことの報告があり、続いてフロアから各報告者への質疑応答およびフリートークが行われました。興味深い論議をかいちまんに紹介しましょう。



Q. 佐々木氏が鳴門教育大学で構築された膨大なデータベースについて。

A. 佐々木—これは単なる絵本リスト作成を目的としたものではなく、発達心理学を基礎に【子どもの心を理解する絵本】1800冊余を子どもの心の発達に基づいて詳細に分析したもので、このデータベースを利用することによって、子どもに対する新たな認識が生まれることを目的としている。将来的には一般に公開される予定。



Q. “よい絵本”は相対的なものと考え得るが、“絶対に悪い絵本”はあるのか？

A. 佐々木—無い。絵本の表現は、人間のある欲望なり思いから生じてきているもの。表現の質として具合の悪いものがあることは事実だが、それを絶対に悪いと決めつけてしまうことの危険の方がより問題だ。

澤田—『かなえちゃんへ』を例に、“許されない”表現は確かに存在する。相対主義の欠点、ものごとの両面性を認めようという意識が問題を隠蔽する可能性は自戒する必要がある。世の中の人間が作ったものに絶対的な悪はないとする危険を反省し、価値意識・態度表明を明確に行わなければならぬときがあるだろう。

松井—どうしても“嫌いな”絵本というものはある。人から批判は受けても、「嫌いだ」と主張することは必要。しかし無自覚に声を挿して批判することは控えるべきだろう。



Q. 茂田井武の『セロひきのゴーシュ』、初山滋の『にんぎよひめ』等は、かつてのダイジェスト版から完全版へ改定されたため、美術表現的観点からはその質が低下したと考えられる。それでも、名作物語等のダイジェスト版はすべて駄目なのか？

A. 澤田—時代を越えて語り継がれる物語は、それ自体力を持ってるので、形を変えて読者の心を打つものだ。完訳か抄訳かは大した問題ではない。



Q. 親が「よい・おもしろい」と思うものだけを選択していると偏ってしまわないか？

A. 松井—親も完全な人間ではないのだから、堅苦しく考える必要もない。大人の楽しい気持ちが伝わればよいのではないか。

司会—絵本を読むことは、親と子の心の触れ合いを楽しむことこそ重要。絵本を与えるのではなく、絵本を読むを通じて、親から子に自分自身という人間そのものを与えている、と考えるべき。



Q. 「モノの本・科学絵本」に関して“おもしろい”絵本とはどのようなものか？

A. 澤田—『ちがうのどれかな？』は、虫の姿を科学的にキチンと描いた上、クイズ的要素も盛り込んだ、非常におもしろい作品だったが、母親たち・保母さんたちの虫に対する拒否反応のため売れなかつた。

佐々木—物語絵本と科学絵本をことさらに区別する必要もないが、「空間と詩のあるもの」は素晴らしいと思う。

フロアの吉田会長—絵本はあくまでもピクチュア&ストーリーにその基本がある。図鑑やカタログにまで絵本の範囲を広げるべきではないが、科学絵本でもリズム&ストラクチャが確かにあるならば、高く評価できると考える。

上記以外にも、さまざまな質問や発言があり、瞬く間に閉会の時間となっていました。“よい絵本”とは何か、というテーマを掲げた今回のフォーラムでしたが、その結論が急に出るはずはありません。しかし、第1部から3部までを通じ、三者三様の表現ではありました。最も大切なことは、大人がまず、自分自身が読みたい絵本を発見すること。親が子どものために絵本を選択するという状況でも、自分自身の明確な価値観を持つべきこと、という点ではかなり共通の認識があったようです。肝心なのは、他者が“よい”と判断する価値基準を深く考えることなく、納得しないままに、自らの“よい”に取り込むことは避けなければならないということ。自らが“好き”と感じる感覚に自信を持つこともまた大事なことでしょう。しかし、今後“よい絵本”的なベーシックな基準に関しては、徹底的な議論が必要だと思います。抽象的な“よい絵本”論に終始することなく、一冊一冊の絵本により密着した具体的な批評が必要とされるのは言うまでもないことでしょう。

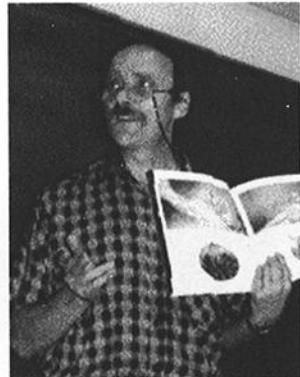
今後も形式にとらわれることなく、この絵本フォーラムを継続して開催していく予定です。内容や会場、開催時期等に関して、ご希望・ご意見・ご批判など何なりとお寄せください。お待ち申し上げております。(こうそかべ・ひでゆき／絵本学会企画委員長)

## 『特別講座』報告

日時：1998年7月24・25日

場所：武蔵野美術大学

講師：デュシャン・カーライ  
(1948年スロバキアのブラチスラバ生まれ。'73年・'75年「金のリンゴ賞」、'83年「不思議の国のアリス」で国際アンデルセン賞受賞。絵本のほかグラフィック、タブロー、アニメーション制作など多方面で活躍されています。)



カーライ氏によるワークショップ



### ◆「デュシャン・カーライによる絵本の創造」 藤田順子

「絵本のつくり方？まずストーリーを考えて…、イラストの構図を考えて…、起承転結の強弱をつけて…ってかんじかしら。」という程度だった私にとって、この講座は「ごめんなさい」と言いたくなるほど絵本を作ることの意味をじっくりと考えさせられるものでした。そして、絵本は読むだけじゃなくて作っているときからこんなに楽しいんだ！ということでも実感できた気がします。そのカーライさんの講演内容を簡単に紹介させていただきます。

今回は、カーライさん独自のストーリーの発想と展開の方法を、その制作プロセスを通しておききするというものでした。

「絵本作家は映画監督と同じ。絵本は、全てそれぞれのページが相互に関連していて、1ページの絵または言葉のみを取出すことは不可能なのです。」と言われるカーライさんの絵本制作は、3つの要素を軸に構築されています。

まずリズム。読み手がページをめくるごとにどんどん引き込まれていけるよう、構図が単調にならないように気を配ります。登場人物の大きさや、文章とイラストのレイアウトに変化をつけていきます。次にアイデア。例えばカーライさんは、ベネチアで出版したシェイクスピアの絵本のどのページにも猫を登場させています。物語の本筋には関係なく、猫がその語りべになっているが如く物語を傍観しているのです。猫はベネチアで最もよく見かける動物だそうです。これを登場させることにより、親しみやすさとストーリーに流れを与えていました。

3つめに動き。登場するもの達が全て右の方向を向いていて、読み手の視線に自然な方向性を与えています。物語の最後は静止した絵で終了。ですが、その次の裏表紙の絵はさらに右向きでそのままカバーに続き、最終的に正面にぐるりとつながるようになっています。まるでメビウスの輪のような終わりのない構成。使用する書体については、昔の物語のときはアンティークな書体、小さな子ども向けの本には分かりやすいゴシック系の書体を使われるということでした。驚かされたのは、その完璧なマケット(スケッチ、下絵)。それぞれのページにイラストが細部まできっちりと鉛筆で描かれていて、文章を含め全ての要素の入る位置や大きさが全部書き込まれています。さらに、出版される大きさと同寸にカットして綴じるところまでやってあるという徹底ぶり。やはり手に取ってめくるところまで実際にやって考えないと、あとから修正したいところが出てきちゃったりするのだろうかと、そのプロ意識に感心しました。制作にはどれも1年以上かけておられるそうですが、こだわるがゆえにスタッフとのけんかはしそうなのだそうです。

またカーライさんは、「'79年にチェコの昔話をアニメーションで制作されています。今回はその作品をビデオで上映していただきました。当時のセットは、120cmの背景(1)の前に背景(2)を置き、さらにその前に切り抜いた人物の絵を配置した、3段階・奥行き4mの巨大なもの。それをはしごに乗ったカーライさんが真上から撮影するという、かなり大がかりな作業だったようです。作品はセリフのないかわりに、BGMと登場人物に当てる光の強弱によって豊かな表情をつくりだしている、とても魅力的なものでした。カーライさんのすごいところは、そのイメージの膨らませ方もあります。「きのうの夜、ホテルで作ってきました。」とニコニコおっしゃいながら見せて下さるスケッチには、1匹のワニがワニ型のポットになっていたり、お風呂に入っていたり、百合の花の柄の水着を着ていたり(ヨーロッパにはワニは百合の花が好きといわれがあるそうです)、七変化の状態。会場では次々に現れるカーライさんの不思議でかわいいスケッチにくすぐり笑いがたえませんでした。最後に、これもまた前の晩に作ってこられた『しかけ』あそびも紹介。『しかけ』は読み手が遊びを通して直接本に参加できます。力エネルギーがとびはねるパラパラまんがや、いろんな動物の頭・胴体・足を組み合わせるモンタージュゲームなどの、たくさんのおもしろいしかけに驚いたり喜んだりしているうちに講座は終了となりました。カーライさんのお話をきいていると、絵本のもつ可能性を最大限に活かす理論をしっかりと考えられている上に、全然頭でっかちにならずに子どものような心で絵本制作そのものを楽しんじゃってる、という気がします。それは絵本の作り手の方にとってはあたりまえなことなのかもしれません。なんだかとてもいい気分で、改めて絵本の魅力に触れた2日間でした。(ふじた・じゅんこ)

(右ページ記事内容の関連写真)  
「絵本学会〔関西圏〕の集い」の呼びかけ人と参加した運営委員



## 「絵本学会【関西圏】の集い」報告

窪田美鈴

11月21日、大阪国際児童文学館において『絵本学会【関西圏】の集い』が開催された。

絵本フォーラムや研究大会など、これまでの絵本学会の主なイベントは、会員の大半が関東在住であることから、東京で行われざるを得なかった。そのため、遠方に住む会員は気軽に参加することも出来ず、せっかく期待をもって入会したのに、その活動の内容がほとんど見えてこないという不満も出始めている。絵本学会の基本精神であるく幅広い視点からの絵本学の構築と、様々な領域の人方が集い、研究・学習・議論し合える場の実現>を具体化するために、全国各地でそうした催しを積極的に開く必要があると思われる。運営委員会でも、地方へ運動の輪を広げる方法が色々と模索されているようだ。そんな中、鳥越信・香曾我部秀幸両氏より、まず手始めに関西以西に在住する会員に呼びかけ、顔合わせを兼ねて今後の展開を考える機会を持ってみようという提案がなされ、両氏と中川正文氏、三宅興子氏を呼びかけ人として、今回の集いが催される運びとなった。

### 1) 自己紹介と提言

文学館館長の中川氏からのご挨拶と香曾我部氏からの上記の経過報告の後、今回の集いの主旨である親睦の手始めとして、絵本とどのように関わっているか、今後どのようなことを学会に期待しているか、といったことを含めて自己紹介の場が持たれた。参加者数は会員20名、非会員11名、計31名。予想を上回る一般の方々の参加があり、この集いをきっかけに新しく同志が増えたことは喜ばしいことである。参加者の顔ぶれは、絵本作家、翻訳家、作家志望者、コンピューター関係者(作家・画家の著作リストをインターネットで発信中)、保母さん、手作り絵本サークルメンバー、児童図書研究グループメンバー、デザイン専門学校講師(絵本コース担当)、純粋に趣味としての絵本愛好家(絵具会社勤務、ベビー服・ファンシーグッズのデザイナー、他分野の研究者、主婦など)、文学館研究生(台湾の絵本編集者・翻訳家、日本の絵本研究、中国児童文学研究など)、大学院生(幼児教育学専攻、造形表現論専攻)、研究者(児童文化、児童文学、美術史)等々、実に多彩であった。

### 2) 「絵本フォーラムin関西」「第2回絵本学会大会」「関西での定期的活動」について

学会の活動の全国展開を念頭に置いた運営委員会からの要望が伝えられ、第3回絵本フォーラムと第2回絵本学会大会を、関西地区で開く可能性について話し合われた。

まずは、企画委員会・実行委員会の結成や会場の提供を含めて、具体的準備をどのように進めていくかが議題となった。これらの委員会に一般的の会員が積極的に参加して欲しいというのが、今回の集いの呼びかけ人の意向であった。しかし、当初呼びかけ人と参加者との認識には食い違いがあり、一般的の会員はどうしても「学会」という響きの持つ権威を感じ、「どういったことをするのかが分かっていないと、私がやりますとは言えない。」といった戸惑いがあった。そのような反応を受けて呼びかけ人より、「企画委員や運営委員といえば大学関係者という印象があるが、それ以外の人が積極的に参加するのがこの学会の特色だ。」「どういう方向に進むか分からないというのではなく、自らが主体となって方向性を打ち出してほしい。」「権威的なものはない、ということを一人一人が認識して欲しい。」といった意向が伝えられた。そうしたやりとりを経て、最終的には

呼びかけ人と参加者の認識はある程度共通するところに至ったのではないだろうか。

フォーラムの内容に関しては、「東京でのフォーラムと同じ内容を関西でもして欲しい。是非聞いてみたい。」「東京でのフォーラムの形式を踏襲する必要はない。もっと色々な形態のものが出来て良いのではないか。関西独自のフォーラムの形を考えていけばいい。」「事前に指定の絵本を各自用意し、共通の基礎知識をもってフォーラムに参加する、という形をとるほうがいい。」といった意見が出た。また、フォーラムのテーマに関して、「例えば『共生共存』というような一つのテーマについて、絵本という媒体をもって考えるというのも面白いのではないか。」という提案もあった。

そのほか、「絵本学会の活動をフォーラムや大会開催といった形式的なことから始めるより、まずは会員が何をしたいかをアンケート等で把握するべきだ。」「名簿の専門分野の欄に選択肢を設け、同じ分野の人が一目で分かるようにすれば、勉強会のような小さな集まりを開くという動きも出てくるはず。」といった意見も出た。

### 3) 国際児童文学館所蔵絵本資料を楽しむ。

鳥越信氏より、明治18年発行のちりめん本から、日露戦争の影響の色濃い戦時下の絵本、大正期の絵本、昭和初期の絵本、戦後の絵本まで、文学館所蔵の貴重な絵本資料を、ご自身の編集者時代のエピソードなどを交えつつ、近代絵本の歴史の流れに沿って紹介していただいた。普段なかなか目にすることのできない絵本を前に、参加者一人一人、それぞれの楽しみ方、捉え方ができたのではないかだろうか。今後このような形の勉強会・研究会が各地域で開かれていけば有意義な活動となるだろう。今回は残念ながらそれらの絵本を直接手にとって見ることはできなかったが、申請すれば誰でも稀観資料を目にすることが出来るとのこと。冒頭の中川館長のご挨拶の「鈴は鳴らさなければ鈴ではない。本は読まれなければ本ではない。文学館は利用されなければその役を果たさない。」の言葉が深く心にしみた。



「絵本学会【関西圏】の集い」に参加された会員の方々  
集いを終えて

会員間の交流などに時間を費やしたため、フォーラムや全国大会の開催を含めて、関西圏での定期的活動をどのように進めていくのか等について、確固とした意志の集約はできず、多くが今後の課題として残された。しかし、この集いによって、一部ではあるが近隣地域の会員が初めて顔合わせを果たし、新たな会員間のつながりも生まれた。また、現在のところ西地区では唯一の運営委員兼企画委員でもある香曾我部氏に、関西圏の核を担ってもらうという共通の認識もでき、関西圏の会員の拠り所が明確になった。今回の集まりを契機に、今後の絵本学会の活動が、参加者一人一人の意識の高まりによって、新たな展開を迎えて活発化していくことになりである。(くぼた・みすゞ／神戸大学大学院修士課程・造形表現論専攻)



#### ◆「絵本学会 NEWS」記者募集のお知らせ

広報委員会では、「会員による身近なNEWS」をめざして、「絵本学会NEWS」の新しい企画を計画中です。その一つとして、国内・海外に広く散らばる会員のさまざまな活動を紹介するコーナーを、来年から始めます。

そこで、「絵本学会 NEWS」の取材記者を募集いたします。

あなたの住んでいる地域の読み聞かせサークルや家庭文庫、勉強会などを取材して、NEWSで紹介してください。また、絵本作家の仕事場探訪・インタビューなども、いずれ企画する予定です。

会員の皆様の参加を心よりお待ちしています。我こそはと思う方は、どうぞお気軽に、事務局までご一報ください。



#### ◆あなたの活動を教えてください！

記者募集の欄でも述べましたように、今後、この『絵本学会NEWS』で会員の方々の活動を紹介させていただきたいと思います。

そこで、NEWSに掲載するための情報をご提供ください。ご自身の活動はもちろん、お子様が通っているいらっしゃる学校や幼稚園・保育園のこと、図書館・美術館など、あなたが参加されている活動なら何でも結構です。

情報を寄せくださる方は、事務局までFAXまたは郵便でお知らせください。たくさんの情報を待ちしております。



#### ◆【伝言板】&【会員の声】コーナー開設！

次号から、会員の皆様の声をピックアップする2つのコーナーを開設いたします。

【伝言板】…絵本に関する情報交換のコーナー。「こんな絵本を探しているんだけど…」「この絵本の出版社を教えて」「サークル会員募集」など、知りたい情報、知っている情報をお寄せください。

【会員の声】…絵本について思うこと、絵本や絵本展覧会の感想、また絵本学会(NEWSも含む)に対するご意見・ご提案など、あなたの声をお聞かせください。



KATSUMI KOMAGATA

●投稿方法：FAXまたは郵便で、氏名(ペンネームも可)・住所を明記して、事務局までお気軽にご投稿ください。

絵本学会事務局

〒187-8505 武蔵野美術大学内(住所不要)

TEL:042-342-6091 FAX:042-342-5173

## information

### ◎絵本関係展覧会・イベント

#### ●世田谷文学館

《第4回収蔵品展 懐かしの童謡・歌謡の世界—北原白秋・西条八十》  
1998.12.12(土)～1999.1.31(日)

《小展示 岡野薰子展—創作と挿絵の世界》

1998.12.19(土)～1999.1.31(日)

岡野氏より寄贈された約400点の資料の中から『銀色のラッコのみみだ』の原稿、原画を中心に紹介します。

《写真展 『赤毛のアン』とその故郷》

1999.2.27(土)～1999.4.11(日)

『赤毛のアン』の舞台となったカナダのプリンス・エドワード島に見られるアンゆかりの風物を物語に即して紹介します。

#### 《講座》

「子どもの成長と物語」齊藤惇夫(児童文学作家)

1999.3.7(日) 14:00～15:30

「昔話が語る子どもの成長」小澤俊夫(独文字学者)

1999.3.17(水) 10:00～12:00

「私の世田谷時代と作品のできるまで」岡野薰子(童話作家)

1999.3.21(日) 14:00～15:30

\*いずれの講座も無料、事前申込70名

#### 《ワークショップ》

「ミトンのくまさんつくって動かして遊ぼう」高田千鶴子(保育と人形の会)

1999.3.10(水) 10:00～12:00

\*材料費1000円、事前申込30名

「ぼくにもできるかな工作教室」石井マリ子(人形劇俳優・美術家)

1999.3.31(水) 10:30～12:00

\*無料、事前申込30名

申込方法…講座・ワークショップとともに往復ハガキに希望講座名・

住所・氏名・年齢・性別・電話番号を明記し、当館図書係へ。2/28  
消印有効。1講座につき1通。応募者多数の場合は抽選。

[開館] 10:00～18:00(入館は17:30まで)

[休館日] 月曜日(祝日の場合は翌日)

[入館料] 無料

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山1-10-10

TEL:03-5374-9111

#### ●安曇野ちひろ美術館

1998.12.1～1999.2.28は冬季休館。

#### 《1999年展示スケジュール》

〈会期〉	〈ちひろ展〉	〈企画展〉	〈世界の絵本〉
3/1～5/11	ちひろの春	現代中国絵本画家展 「赤い鳥」展	世界の絵本画家 ／絵本の歴史
5/14～7/13	初夏のちひろ	大正の童話童謡雑誌	世界の絵本画家 ／絵本の歴史
7/16～10/5	ちひろの夏	ユゼフ・ヴィルコン展	世界の絵本画家 ／絵本の歴史
10/8～11/30	ちひろの秋	1990年代・日本の 絵本展	世界の絵本画家 ／絵本の歴史

【開館】1999.3.1～11.30  
9:00～17:00(G.W.と8月は18:00まで)  
【休館日】水曜日(祝日開館、翌日休館)G.W.と8月は無休  
5/13・7/15・9/16・10/7・11/4(各木曜)は臨時休館日  
【入館料】大人800円・中高生500円・小学生300円  
〒399-8501 長野県北安曇郡松川村西原  
TEL:0261-62-0772

### ●ちひろ美術館

《ちひろの絵本づくり》  
開催中～1999.1.15(金)  
1968年～1973年に毎年  
1冊ずつ発表された、ちひ  
ろが絵も文も手がけた至光  
社の絵本シリーズから、「ゆ  
きのひのたんじょうび」「あ  
めのひのおりすばん」「あか  
ちゃんのくるひ」の3冊を  
紹介。絵本原画のほか、習作  
や制作エピソード、ちひろ  
のことばも交えて、ちひろ  
の絵本づくりを読み解いて  
いきます。(展示作品数：約60点)



《中国の絵本作家たち》  
開催中～1999.1.15  
(金)  
イギリスやアメリカの  
絵本の影響を強く受け  
て発展した日本では、取  
り上げられる作品の多  
くが欧米の絵本で、アジ  
アの絵本に目が向けら  
れる機会は多くありません。日本文化の根底に流れている中国の文化——中国の絵本を読  
み解していくことは、日本の絵本を考える上でも意味があります。本展は、ちひろ美術館で初めて中国の絵本を紹介する展覧会です。悠久の歴史と文化に育まれた、個性あふれる中国の絵本をお楽しみください。(展示作品数：約60点)

後援：日本国際児童図書評議会(JBBY)、絵本学会  
【開館】10:00～17:00(金曜日は19:00まで)  
【休館日】月曜日(祝日開館、翌火曜日休館)  
【入館料】大人500円・中高生200円・小学生100円  
〒177-0042 東京都練馬区下石神井4-7-2  
テレホンガイド:03-3995-0820

### ●軽井沢絵本の森美術館

・第2展示館  
《20世紀絵本原画展～21世紀への架け橋～》  
開催中～1999.1.18(月)  
印刷技術の発展、児童文学に対する関心、図書館施設の充実を根底に大きな変化をとげた20世紀の絵本界。現在では多くの絵本が出版され、作家たちの表現の場ともなった今世紀の絵本を、ロングセ



ラー絵本によって振り返る。レズリー・ブルック、ハンス・ド・ビア、ドゥシャン・カーライなど20世紀を代表する画家35名の原画約60点、そして古典絵本から現代の新鋭作家の絵本まで約70点を公開。

#### ・第1展示館

《欧米絵本のあゆみ：17世紀からの絵本のうつりかわり》  
開催中～1999.1.18(月)

A展示室：17世紀からの絵本のうつりかわり

B展示室：コールデコット賞受賞絵本の紹介

ビデオルーム：ロングセラーの絵本からの作品上映

【開館】10:00～16:00(最終入館15:50まで)

【休館日】火曜日(祝日開館、翌水曜日休館)、年末年始(12.26～1999.1.1) ※1999.1.19(火)～3.2(火)まで冬期休館

【入館料】大人700円・中高生500円・小学生400円(エルツおもちゃ博物館との割引共通チケットもあり:大人900円・中高生700円・小学生500円)

〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町塩沢182-1

TEL:0267-48-3340

### ●大島町絵本館

・ギャラリー

《野村なおこ絵本原画展》～素材を生かしたコラージュの世界～  
1998.11.28(土)～1999.1.28(木)

《二俣英五郎絵本原画展》～あたたかみのあるユーモラスな画風～  
1999.1.30(土)～1999.3.30(火)

・カフェギャラリー

《第五回全国手作り絵本コンクール入賞作品&出版記念絵本原画展》  
1998.12.1(火)～1998.12.27(日)

《年賀状展&創作折り鶴作品展》川縁 遊  
1998.12.1(火)～1998.12.27(日)

《絵本館を彩るビンドール展》島田 明子  
1999.1.30(土)～2.25(木)

《押し花サロン展》絵本教室受講生の絵本展  
1999.2.27(土)～3.30(火)

・パフォーマンスホール

《新春空間アート》  
1999.1～

《絵本館のひな祭り》  
1999.2～

・シアター他  
**《語りの会&エンジェルス交流会》**  
 1999.1.23(土)14:00～  
**《童謡唱歌ファンタジーコンサートVI》**  
 1999.2.7(日)14:00～  
 出演：女声合唱団「ヴォーチェ・フォンターナ」  
**《おおしま絵本のつどい'99》**  
 1999.3.7(日)  
 \*特別ワークショップ  
 講師：駒形克己(グラフィックデザイナー・絵本学会会員)  
 会場：大島町農村環境改善センター  
**《おたのしみ絵本館》**  
 1999.3.28(日)  
 ・親子の創作教室  
**《ふんわりともる心の灯》**  
 1999.2.27・28  
 ・絵本教室  
**《やさしいCG絵本教室》**  
 1999.1.16・30、2.6・13・20 土曜日午前  
 講師：絵本館職員  
 [開館] 10:00～18:00  
 [休館日] 月曜日(祝日の場合は翌日)・月一回整理日  
 [入館料] 大人900円・小中生500円  
 ☎ 939-0283 富山県射水群大嶋町鳥取50  
 TEL:0766-52-6780 fax 0766-52-6777  
**●大阪府立国際児童文学館**  
**《ムーミンとヤンソン》**  
 開催中～1998.12.27(日)  
 ムーミンの絵本や作者ヤンソンの写真など60点ほどを通してムーミン童話の世界を紹介。  
**《国際講演会 オーストラリアの“マンガ”(仮題)》**  
 1999.1.17(日)2:00～4:00  
 講師：ジョン・フォスター氏(当館客員研究員・サウス・オーストラリア大学教授)  
 通訳：石川晴子氏  
 参加費 1000円、申込は電話または当館カウンターまで  
 ・こども室  
**《カルタとり大会》**  
 1999.1.10(日) 14:00～15:00  
 絵本に出てくる動物などのキャラクターが登場する「絵本カルタ」をつくって、カルタとり大会をします。  
 対象：こども・大人  
 参加費無料、申込は当日参加で  
**《おはなし会「うさぎのおはなし」》**  
 1999.1.17(日) 14:00～14:30  
 今年の干支である「うさぎ」にちなんで、お話を聞いたり、絵本を見たりします。  
 対象：こども・大人  
 参加費無料、申込は当日参加で  
**《ワークショップ「おはなしであそぼう」》**

1999.1.24(日) 14:00～15:00  
 おはなしの世界を声や体を使って体験します。  
 対象：こども・大人  
 参加費無料、申込は当日参加で  
 [開館] 9:00～17:00  
 [休館日] 水曜日・年末年始(12.28～1999.1.4)・1.31(日)  
 [入館料] 無料  
 ☎ 565-0826 大阪府吹田市千里万博公園 10-6  
 TEL:06-876-8800

**●ブライアン・ワイルドスミス美術館**  
**《What Next?展～ワイルドスミスのちいさなえほんシリーズ～》**  
 開催中～1999.2.2(火)  
 ブライアン・ワイルドスミスとその次女レベッカ・ワイルドスミスとの共作により、1993年から出版されている独創的な幼児向け絵本、What Next?(次はなあに?)ブックシリーズ。今回の展示では、今年春に出版された日本語版シリーズの出版を記念し、そのうち4作品の原画を展示。ワイルドスミス父娘が繰り広げる想像力と発見、謎と驚きにあふれた絵本の世界を紹介する。  
 [開館] 9:00～17:00(入館は16:30まで)  
 [休館日] 水曜日(年末年始・祝日は開館)  
 [入館料] 一般 700円・小学生 500円  
 ☎ 413-0235 静岡県伊東市大室高原 9-101  
 TEL:0557-51-7330

**●斑尾高原絵本美術館**  
**《黒井 健 絵本原画展》**  
 開催中～1999.1.18(月)  
 新潟市出身で、現在までに150冊を超える絵本・画集を発表している黒井健氏。本展では、クリスマス・イブのサンタクロースの1日を優しいタッチで綴る『12月24日』より前場面、ほか全40作品を展示。  
 [開館] 9:30～18:00(休前日は19:00まで)  
 [休館日] 火曜日(祝日開館、翌日休館)  
 [入館料] 700円(飲物付)・幼児無料  
 ☎ 389-2257 長野県飯山市斑尾高原 11492-224  
 TEL:0269-64-2807





### ●ペイン美術館

#### 《収蔵品展》

1999.1.1～3月下旬

フランスの画家、レイモン・ペインの作品を当館収蔵品により展示。水彩・ペン画・リトグラフなど約60点で構成。冬から春への季節感をイメージさせる作品を選びご覧頂きます。

[開 館] 10:00～16:00

[休館日] 火・水・木曜日(冬期)3月より無休

[入館料] 大人900円・小中生500円

〒389-0111 長野県北佐久群軽井沢町塩沢湖217 軽井沢タリアン内 TEL:0267-46-6161

### ●弥生美術館

#### 《「新青年」の挿絵画家 松野一夫展 ～昭和モダン・ボーイズ グラフィティ～》

開催中～1998.12.25(金)

昭和初期、モダン・ボーイ達のバイブルと称された雑誌『新青年』。その表紙、口絵、挿絵を手がけた画家、松野一夫の、『新青年』における作品に焦点をあて展覧する。また、これまであまり知られることのなかった児童雑誌、婦人雑誌、新聞小説の挿絵、晩年のスケッチなども紹介し、松野の画家としての軌跡を検証していく。



### 《右田年英と明治の挿絵画家展 ～口絵の中の美人たち～》

1999.1.3(日)～3.28(日)

月岡芳年門下の四天王の一人といわれ、日清・日露戦争や美人・役者などの錦絵を手がける一方、朝日新聞の専属画家として40年近くも新聞小説の挿絵を描き続けた画家、右田年英。本展では錦絵、スケッチ、日本画、新聞挿絵などを中心に展覧。またもう一つのテーマ「日露戦争以降の浮世絵衰退から木版口絵の隆盛」として、明治期に活躍した挿絵画家を、主に雑誌『文藝俱楽部』の木版口絵を通して紹介する。

[開 館] 10:00～17:00(入館は16:30まで)

[休館日] 月曜日(祝日開館、翌日休館)

[入館料] 一般700円・大高生600円・中小生400円(隣接の竹久夢二美術館と共に立原道造記念館も観賞できる三館共通券1000円)もあり

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-3

TEL:03-3812-0012

### ●竹久夢二美術館

#### 《竹久夢二 世紀末の夢展 ～西欧絵画のエッセンス～》

開催中～1998.12.25(金)

竹久夢二という一人の画家の眼を通して、西欧美術がどのように受容、展開されたのかを探る。夢二作品のなかに西欧の世紀末芸術の影響が見られることは、従来より多くの研究者によって指摘されてきた。本展は、夢二作品約180点と、関連作品約50点の展示を通じて、実際にこの見解を検証する初めての試み。

#### 《竹久夢二「四季の美」展 ～絵と詩でつづる春夏秋冬～》

1998.1.3(日)～3.28(日)

画家そして詩人の視点から、夢二は春夏秋冬にみる季節ごとの行事をはじめ、女性の装いや子供たちの遊びにみられる風俗、さらには草花の成長も含め、人々の生活に身近な四季折々の変化と魅力を捉えていった。本展では、独特の四季の世界を展開している夢二の絵と詩250点を紹介する。

[開 館] 10:00～17:00(入館は16:30まで)

[休館日] 月曜日(祝日開館、翌日休館)

[入館料] 一般700円・大高生600円・小中生400円(隣接の弥生美術館と共に立原道造記念館も観賞できる三館共通券1000円)もあり

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-2

TEL:03-5689-0462

### ●竹久夢二伊香保記念館

#### 《夢二の美意識 ～意匠の世界展》

開催中～1999.1.20

(水)

夢二が制作したポスター、商標、CMソング、ブックデザインなどを紹介。

#### 《夢二の小糸な世界(2)》

開催中～1999.3.31(水)

夢二ならではの版画作品の魅力を一枚ものや挿絵、小物などで紹介。



[開館] 8:00~18:00

[休館日] 無休

[入館料] 大人 1500円・小人 1200円(音のテーマ館券付)

〒377-0102 群馬県北群馬郡伊香保町 544-119

TEL:0279-72-4788

#### 《イギリス絵本の世界展》

1960年代、イギリスは絵本の黄金時代を迎えました。今回はこの絵本黄金時代の先駆者たち、チャールズ・キーピング、ブライアン・ワイルドスミス、クウェンティン・ブレイク、レイモンド・ブリッグス、ビクター・アンプラス、マイケル・フォアマン、アンソニー・ブラウンの7名を厳選し、各作家の絵本に対する姿勢や、時代背景に触れながら、非常に質の高い原画250

展を紹介します。7人全員が、絵本画家にとっての最高の栄誉であるケイト・グリーナウェイ賞受賞者です。



\*開催会場は次の通り。

#### ●河口湖町立河口湖美術館

1998.12.5(土)~1999.1.17(日)

[開館] 9:30~17:00(入館は 16:30まで)

[休館日] 1998.12.24・29~31、1999.1.5~8・12

[入館料] 一般 800円・大高生 500円・小中生 300円

〒401-0304 山梨県南都留郡河口湖町河口 3170

TEL:0555-73-2829

#### ●広島・三越

1999.3 中旬予定

主催: 読売新聞社、美術館連絡協議会

後援: ブリティッシュ・カウンシル、日本国際児童図書評議会

協賛: 花王株式会社

協力: ヴァージン・アトランティック航空、伊豆高原ブライアン・ワイルドスミス美術館

企画: (株)エム・エ・エム

## 事務局からのお知らせ

#### ●第2回絵本学会大会について

第2回絵本学会大会の開催場所をこのニュースでお知らせする予定でおりましたが、先日の運営委員会で確定することができませんでした。関西地区の候補校はいくつか上がっておりますが、交通の便、事務局スタッフの確保など、解決しなければならない問題があります。場所、日時など決まり次第お知らせいたします。

#### ●理事会・運営委員会

9月 20日 運営委員会 於: 世田谷文学館

議題

・次会絵本学会大会事務局について

次会大会を関西で開催することを検討。11月 21日に予定されている関西地区での会合の結果を待って検討することになった。

・学会機関誌の発行について

・今後の活動計画について

第3回絵本フォーラムを1999年3月大阪国際児童文学館で開催すること、絵本学会ホームページの更新などについて検討。

12月 12日 運営委員会 於: 日本女子大学吉田研究室

議題

・次会絵本学会大会事務局について

・絵本学会ニュースの編集について

機関誌刊行のための環境が整わない現状を考え、当面、絵本学会ニュースの記事内容を充実させることが検討された。

・研究紀要の進捗状況について

6編の応募があり、委員による査読の結果、第1号についてはすべて掲載することになった。

発行は、1999年3月を予定。

・機関誌の刊行について

・今後の活動計画について